

「宗教改革記念日」

2014年10月31日

今日は「宗教改革記念日」である。1517年10月31日、マルチン・ルターはヴィッテンベルグの教会の門に「95ヶ条の提題」を貼り出した。当時、カトリック教会は、大聖堂を建設するお金を必要としたために「免罪符」を売り出した。これに、ルターは反対し、疑義を表明したのである。「95ヶ条の提題」の27に「箱の中へ投げ入れられた金がチャリンと鳴るや否や、魂が煉獄から飛び上がると言う人たちは、人間を伝えているのである」と書いている。ヴィッテンベルグ大学の教授であったルターはローマの信徒への手紙1章17節の「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」という御言葉から「神の義」について、新しい理解を示していた。それは、神の救いは「善行」によってではなく、キリストを信じる「信仰」によって与えられるという理解であった。「信仰義認」の教義を強調したのである

ルターが起こした宗教改革は、この「信仰義認」に根幹がある。宗教改革は三原則を生み出した。第一は「信仰のみ」である。「信仰」と「善行」が車の両輪のように作動して救いに与ると説かれると「なるほど、そうか」と納得できたような気になる。しかし、それは違う。「善行」への意思是心の中から生まれてくるが、「善行」は体力、経済力、時間がある者にできる。寝たきりの病気になったら「善行」はしたくてもできない。「善行」を救いの条件にすると、できない者は救われないことになる。「免罪符」を沢山買った者は多く赦され、少ししか買えなかった者は少ししか赦されないことになる。神の前では差別はない。「善行」に関わりなく「信仰のみ」によって義とされ、救われるのである。

ただ「信仰」の持ち方が良かったから救われたと言うと、「信仰」が「善行」と同じような救いの条件になる。正しくは、イエス・キリストの真実（十字架と復活）によって、すべての人が既に救われている。これが、聖書が告げる福音である。

第二は「聖書のみ」という原則である。当時、教会は絶大な権威と権力を持っていた。救いは「聖書」と「教会」から来ると説かれていた。教会の伝統に服し、教会に聞くことが救いへの道であった。ルターは「教会」を取り去り「聖書のみ」と言った。聖書はラテン語で書かれていて、一般民衆から遠く、司祭たちの独占物であった。ルターは聖書をドイツ語に翻訳し、誰でも読めるようにした。これによって、「聖書」が決定的に民衆のものになった。神の恵みは、教会を通して伝達されるが、教会の独占物でないことを謙虚に知っておくことが大切である。聖餐は教会の維持、発展のための道具ではなく、求める者には開かれた神の恵みである。私は「オープンコミュニオン（未受洗者も陪餐できる）」がイエス・キリストの思いであると信じている。

第三の原則は「万人祭司」である。当時、教会は権力を持つがゆえに墮落していた。枢機卿の赤い帽子がお金で売り買いされていた。また「告解」を大事な聖礼典としていたが、「告解」における罪の赦しが、絶対的な権威を持つ祭司たちの手に握られていた。ルターは神への執り成しは、祭司が独占しているのではなく、信徒は互いに罪を執り成すことができる祭司同志であると「万人祭司」を説いたのである。

宗教改革の三原則は、人は皆、神に赦された存在として「義」とされている、今日の言葉で言えば「アイデンティティ」、主体を持つ個人として生きよというメッセージであった。これが、中世から近代に向かう出発点になっていったのである。